

# 子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

## 論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Caesarean section and childhood obesity at age 3 years derived from the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

帝王切開出生と3歳時点における小児肥満の関係

ユニットセンター(UC)等名: 富山ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Scientific Reports

年: 2023 DOI: 10.1038/s41598-023-33653-7

筆頭著者名: 寺下 新太郎

所属 UC 名: 富山ユニットセンター

目的:

本研究では、肥満の有病率の低い日本人において、帝王切開で出生した児は経膈分娩で出生した児と比較して、3歳時点での小児肥満有病率が増加しやすいかどうかを明らかにすることを目的とした。

方法:

エコチル調査に参加した母子のうち、多胎、流産、死産、欠損値などを除いた 60,769 組を対象とした。分娩様式から帝王切開出生と経膈分娩に群別し、3歳時点での小児肥満有病率を比較した。小児肥満の定義は国際肥満タスクフォースに従い、男子が肥満度指数(BMI) 17.89 以上、女子が BMI 17.56 以上とした。母体因子および児因子を用いて逆確率重み付けで調整したロジスティック回帰モデルを適用して解析した。

結果:

60,769 人中 4,912 人(8.1%)が3歳時点で小児肥満であった。母体因子および児因子で調整すると、帝王切開で出生した児の小児肥満罹患リスク比は経膈分娩で出生した児と比較して 1.16(95%信頼区間 1.08-1.25)となり、有意に高かった。さらに男女別に解析したところ、両性において小児肥満のリスク比は帝王切開で出生した児において有意に高かった(男児: 1.14 [1.01-1.27], 女児: 1.21 [1.09-1.33])。

考察(研究の限界を含める):

帝王切開で出生した児において小児肥満が多い傾向にあることは先行研究で指摘されている。小児肥満の有病率を考慮する上で人種・民族は重要な要素であり、アジア人には肥満が多い一方で、日本人は最も肥満になりにくい民族のひとつとされている。この研究は、日本人に焦点をあてて帝王切開出生と小児肥満の関係性を初めて明らかにした報告である。本研究の限界として、肥満に至る直接的な原因を追うてきていないこと、3歳時点での小児肥満が成人肥満および肥満に関連する健康障害の増加に関連するかを検討できていないこと、などが挙げられる。

結論:

日本人において、帝王切開出生は経膈分娩出生と比較して、3歳時点での小児肥満のリスクを上昇させる可能性が示唆された。